

[17] Crossover

<https://doi.org/10.15017/19353>

出版情報 : Crossover. 17, pp.1-29, 2004-07. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン :
権利関係 :

「官」と「民」の狭間で

—— 法人化をめぐる ——

高 田 和 夫

(比文学府長)

今回の国立大学大改革は国家公務員の定員削減問題にその源を発しており、単純にそれを実現しようとするれば、国立大学を民営化すればよかったが、文部省（あるいは文科省）の抵抗にあって、国立大学法人といったところで落ちついたと、昨今、言われているようです。この理解がそれ相当に妥当だとすれば、大学に出現した新たな事態に私たちが何か落ち着きのない中途半端さを感知したとしてもそれほど見当外れではないことになるかもしれません。

確かに、四月以降、旧国立大学はいわば「民」と「官」の間を彷徨うがごときです。組織運営では従来の規制が大幅に緩和され多くの事項が大学の責任で独自に決することができるようですが、一方では、中期目標・中期計画が導入され、それが予算要求の根拠になると同時に大学評価の基準にもなるそうです。その結果次第では国税を充当する運営費交付金（国立大学法人の基礎的財源）が増減されるようです（減だけで増はないのかもしれませんが）。学務分野において授業料や入学料など学生納付金は国が定める標準額の+10%の範囲内で大学の自由裁量に委ねられ、また、財務分野では運営費交付金の使途は自由になる反面、効率化係数および経営改善係数が導入されるそうです。このように大学運営の基本的な局面において、「民」と「官」が出たり入ったりしています。私たちが新制度の中で何か不安定な日々を過ごすようになった背景にはまずこうした事情があるように思われます。

さて、四月一日に梶山総長は「法人化を超えて——九州大学の挑戦」というメッセージを出しました。これは九州大学史において取分け大切な文書のひとつとなるべきものです（大学HPや『九大広報』別冊四年四月で見ることが出来ます。同年一月に出された総長の「法人化に向けて」も必読です。法人化されると総長の権限が強化されますから、その発言にはこれまで以上に注目する必要があります）。これらを見ると、総長の法人化理解（対応）は特徴的です。つまり、本来、国立大学は自主的自立的に改革を行うべきであったが、怠り気味であった。法人化はそのためのちょうど良い機会だから、この際、「法人化を超えて」、それを行おうというのです。「法人化に向けて」の中で、「特色ある優れた大学への移行」が「法人化

の精神」であるというのは明らかに総長一流の読み替えです。これはひとつの見識であり、考え方だと思われます。

大学全体の行動計画が「4-2-4アクションプラン」として示されています。最初の4は「九州大学の使命」であり、活動分野である「教育」「研究」「社会貢献」「国際貢献」を指します。次の2は将来構想の方向性を示し、具体的には「実績に基づく新科学領域への展開」と「歴史的・地理的な必然が導くアジア指向」のふたつです。最後の4ですが、評価に基づく大学からの支援の中身に相当し、具体的には「人的資源」「施設・スペース整備」「予算措置」「教育・研究のための時間の拡大」をいいます。このように、この「アクションプラン」では、「使命」や「将来構想」にたいする貢献には具体的な褒賞でもって応えようという分かり易い構図が描かれています。

こうした「アクションプラン」と比文の理念を比べるとどうでしょうか。ご承知のように、私たちは「異なる社会文化の共生を目指した研究教育」、「学際的なアプローチ」、「日本と世界を結ぶ行動人の養成」、そして「社会に開かれた学問」を比文の理念や理想としてきましたから、乱暴に言うと、最初の4-2に関しては、「アジア指向」を除くと、内容上はそれほど相違しないように思えます。「教育」「研究」は当然ですが、私たちの「日本と世界を結ぶ行動人の養成」などは、総長メッセージがいう「社会貢献」と「国際貢献」の双方に同時に対応しようとするほどのものです。「新科学領域への展開」の方は、比文は「学際的なアプローチ」による「比較社会文化学」の開拓を目指しております。つまり、すでに十年前から比文はこうしたことを掲げてきている。勿論、それがどういう成果を生んでいるかは絶えず点検され改善されなくてはなりません。が、「アクションプラン」に照らしてみても、これまで通り、私たちは四つの理念の実現に向けて進めばよいと思われます。不必要に動揺することなどは無用です。

ただ、「アジア指向」ですが、比文は組織としてそれを掲げたことはありません。そのために教員人事をとくに工夫することもなかったし、比文教員のすべてが「アジア指向」に対して賛同していないことも研究院長として承知しています。しかしながら、日本と東アジアとの歴史的関連性を追及する比文

と人文科学学府の共同事業プログラムがCOEに採択され、その実績を示す必要から私たちは「アジア」に関わる度合いが今後、強くなっていくことが大いに予想されます。これからは「アジア指向」を私たちのものとして考えなくてはならないようです。

さて、上に触れた「アクションプラン」に関して注意深く認識する必要があるのは、最後の4についてです。それは評価に基づく教育研究資源配分を指向しています。明らかに、「アクションプログラム」は競争原理に立脚することで、法人化局面に対応しようとする特徴を備えています。今後、教育研究における成果が益々、厳しく査定されるでしょうが、私たちはそのように対処してきたと思いますから、格段の恐れを抱く必要はないでありましょう。それぞれが自分のペースで進めばよいでありましょう。教育研究の現場にいる者として改めて明言すれば、この分野で何か慣れないことを慌てて企てることほど危ういものはない。成果をあげるために徹夜を重ねたからといって、所定の果実を必ずしも得られないことは、皆、よく知っていることなのであります。

法人化に伴う諸問題で最も関心を持たなくてはならないのは、大学運営に関わる部分でしょう。先に引用した総長メッセージは「法人体制下では、評価に基づく競争原理が導入され、総長のリーダーシップのもと民間的発想と学外者の意見を入れて大学運営が行われます。」といっています。私自身はここでいう「民間的発想」なるものに最も遠く疎い人間ですから、それがどういものかよく分からないのですが、貧困な想像力を働かせて、その具体的現われ(のひとつ)として、市場原理に立脚して目に見える成果を第一としてそれを優先的に顕彰することを意味すると仮に理解しましょう(これが見当違いでないことを祈ります)。これは目に見えるパフォーマンスに高い評価をつけようとする立場です。地味で目立たない分野ほど冷や飯を食う恐れは否定しえず、一般に基礎研究ほどその可能性が高いでしょう。正当にも総長メッセージは基礎研究が「九州大学の本分」であると宣言していますが、それを「標榜し続ける」ことだけに終わらないよう祈るものであります。ここには両立が困難な問題があります。

基礎研究に生涯を捧げてきた研究者が定年になるが、学問の性格もあり、ご当人の人柄も災いしてか、この間、それほど多くの院生を教育する機会には恵まれなかった。大学においてはこうした事例はよくあるでしょう。あくまでも可能性の問題

ですが、その空いたポストを同様な基礎研究に従事する専門家が占めることになれば、院生教育の少なくとも量的不振が続くことが予想され、そうした事態を繰り返すことは出来ないとする判断はありうると私たちは見ておいた方が良いでしょう。ここにあるのは、明らかに待たなしの政策的な選択の問題です。

無論、教育研究の場には単純な「質より量」論がまったく不適合であることは多くの人によって共有されている見識だと思われれます。そこではたとえ一人だけの学生に対してでも丁寧な教育はなされるべきであり、現状では誰にも正当性が疑われるような仮説の検証にも相当な資金とマンパワーが使われるべきです。そして、教育研究活動一般が決して単線的な導線を描くものではないこと、そこには壮大な「無駄」と思われるような試行錯誤が必ずありうるといこと、これらも大学においては周知の常識であり真理でありました。

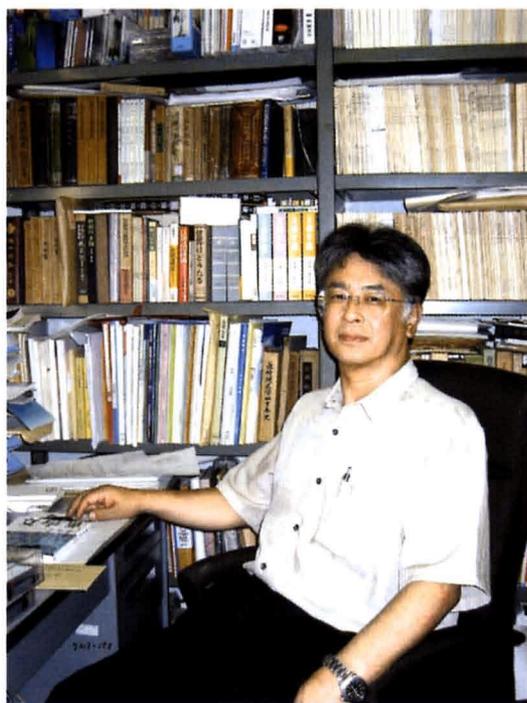
誤解を恐れずに言えば、教育研究の現場が理想と現実の間に挟まって難儀するようになることはある程度は予想されたことなのかもしれませんが、四月以降の法人化の現状は、両立不能性の前に立ち尽くすような事柄に満ちています。そのどちらかを一方的に選択する可能性さえない状況があります(自由に競争しろというのなら、かつての社会主義国にあった「五ヶ年計画」のような中期目標・中期計画(これは「六ヶ年計画」ですが)の縛りはなくすべきでしょう)。ただ、ここで確実に言えることは、そうした「理想」論をどこまで押し通し、どうしたらそれを維持し続けることができるかを判断しなくてはならないところまで私たちは来ているだろうということです。教育研究のための資源を外部からプラスアルファとして導入することなしに、もはや「理想」を追求することは出来ないのだということを確認しなくてはならないのかもしれませんが(運営費交付金の減額がどこまで進むか見当が付きません)。私たちが何の努力をすることなしに事態を放置すれば、そうした「理想」は早晚、雲散霧消するほどの重みしかもはや持っていないのではないのか、別に必要以上に危機感を煽ることは本意ではありませんが、法人化の本質はまずはそうしたところにあるのではないのかと思われれます。「官」と「民」との狭間にあって、今、愚考することは、いずれにせよ、中途半端にならざるをえない。ここで求められるのは大所高所からの賢明なバランス論であります。(2004年5月30日)

花田俊典教授の早すぎる死を悼む

高 田 和 夫

(研究院長)

花田さんの訃報を聞いた足で四階のコモン・ルームに立ち寄ると、テーブルの上には花田研究室で出している『九大日文』の最新号が何冊か重ね置きされていて、「ご自由にお取りください」とメモが乗っていました。その瞬間、私を捉えた深い悲しみを言葉にすることはできません。ここに早すぎる花田さんの死を心より悼み、九州大学大学院比較社会文化研究院の構成員を代表して弔辞を述べます。



(読売新聞提供)

花田さんは1950年9月の生まれです。1979年3月、九州大学大学院文学研究科博士後期課程を中途退学されて文学部助手になりましたが、すぐに翌年から福岡女子大学に勤務されました。1987年4月から九州大学助教授として六本松の教養部に移られ、1994年6月に教授に昇任しました。教授になられた年に私たちの大学院が発足したのですから、花田さんの教授時代は比文とまったく重なっています。九大における教員生活は17年余りでした。

花田さんの研究スタイルには独自なものがありました。それはひとつの事柄を対象としてそれを深く掘り下げるような方法ではなく、多様な問題にアプローチするなかで問題の再編成を行ってひとつの大きな世界像を構築するようなスタイルです。花田さんは今年の全学教育シラバスに次のようなことを書き付けています。

「21世紀の世界はグローバリズムとローカリズムの拮抗・均衡型の社会になると思われる。いずれも情報戦である。このことをいかに意識化し、解体—構築を企画するかは、いよいよ大切な営為であろう。…この問題編成に即して、文学というメディアを対象に考察してみたい。文学というメディアは、情感を喚起する特徴をもつという意味でも、相応の「他者の声」を提供してくれるはずである。」

花田さんにとって研究とは、テキスト内世界で「当たり前」のように見えている光景をまず解体し、批評者自身がそれを再構築して問題編成を試みる不断の運動性のなかにか存在しえないものであったようです。他者の他者性を絶えず新たに、その声を聞き続けたと言ってよいでありましょう。花田さんは、したがって、休むことをしなかった。それが出来なかったと思われる。

花田さんは、しばしば「何が問題なのか？」という問いかけをしました。「私」の問題をいかに「私たちの」問題にするのか、「過去」の問題を如何に「現在」の問題にするかを探求し続け



たと言い換えてもよいでありましょう。沖縄問題、大東亜戦争、原爆文学などきわめて多様な事柄がその対象になりました。しかも、特徴的なことにそれらが有機的な結びつきの中で論じられ、権力や差別の問題を通して、社会がかかえる現実と文学を接続させようとしていたと思われる。「原爆文学研究会」およびその機関誌『原爆文学研究』などはその典型的な実践のひとつでありました。

また、花田さんほど自前の資料、自前の情報、自前の方法をもつことに拘り抜いた研究者は珍しいでしょう。古本屋に通い続けて数万冊はあると思われるほどの蔵書コレクションを築き上げたこと、西南日本文化探査ネットワーク(スカラベの会)を立ち上げ、近代文学・近代文化資料のデータベースを構築し、それを更新し続けたこと、『西日本新聞』に連載した「清新なる光景の軌跡」に九州、山口、沖縄の約300名に及ぶ文学者をとりあげ、詳細な作家履歴を施したこと(これは同名の大著として刊行されました)、同人批評雑誌『敍説』を年二回のペースで刊行し続け、これまで27冊を数えていることなど、花田さんは類稀な行動力と統率力でもって周辺の仲間を動かし、さまざまな企画を現実のものにしてこられました。

しかも、こうした活動において、自分の名前を出すこと、名声を得ようとする行為を軽蔑し、さまざまな考えをもつ人々が柔軟に集合—離散しながら協力し、そこで共有された情報や資料が広く活用され、新しい研究につながっていくことを期待していたのです。彼が急逝する直前まで補正し続けていた『福岡都市圏文学文化年表』は関連情報を網羅しようとする前代未聞の企画ですが、自分で集めた資料を使って自分の手で何年間も文字を入力してきたにもかかわらず、花田さんはそれを自分の著作にしようなどとは考えず、独自の情報をもつ人が年表を充実できるような形式で利用されることを望んでいました。花田さんは社会的な良心の存在を信じようとした心優しい人でありました。福岡市文学館の運営で中心的な役割を果たしてきたためでしょうか、平成13年度福岡市文化賞を受賞されています。

花田研究室がその指導を受けようとする院生諸君たちによって、連日、賑わっていたのは周知のことです。比文という大学院において院生教育に果たした花田さんの役割は計り知れないほどの大きさをもっています。博士後期課程の院生の主たる指導教員として花田さんは一番多数の院生をもっていたのです。しかも、花田さんは慕ってくる院生たちには全身全霊を傾けて指導をしていましたから、おのずからその指導は厳しくならざるをえない。花田さんは、院生たちの研究活



動にたいしても、自分たちの言葉を遠くの他者に届けるにはどうしたらよいのかを自問させ、『九大日本文学会』をつくらせて院生たちの参加を得て冒頭に触れた『九大日文』を出したのです。

また、数多いアジア諸地域からの留学生に対しては、単純に日本文学を学ぶだけでなく、自分にしか見えないこと、自分にしかできないことを掴ませようと努力されていたと思われます。文学テキストを国家、地域、人種、階級などの諸問題と重ね合わせて、世界文学のひとつとして日本文学を考察させようとしていたともいえます。

花田さんは、近々、「近代紀行文学研究会」を発足させて特に近代以降の日本人が世界をどのように歩き回り、いつ、どのようなものを見聞したかを資料として刊行していこう、またその場を院生教育に活用しようとして計画していたようですが、それはかなわぬこととなりました。

このように、花田さんが果たしてきたこと、そしてこれから果たそうとしていたことを思うにつけ、その存在の大きさに私たちは改めて気付きます。花田さんの死は比文という大学院にとって計り知れないほどの痛手ですが、無論、話はそれに止まりません。

花田さんの温厚な顔をもう見るできない私たちはどう「花田文学」を継承していくのか、大きな課題を突きつけられています。

ここに感懐の一端を述べ、花田さんのご冥福をお祈りいたします。

花田さん、どうか、安らかに眠りください。

(2004年6月5日)

(この文章は葬儀の際に読んだ弔辞です。作成にあたり、石川助教授の協力を得ました。)

「世界」を把握するために

比文10周年企画菊畑茂久馬講演会開催

毛利 嘉孝

(文化空間部門文化表象講座)

■比文10周年を迎えて

比較社会文化研究院・学府の設立10周年記念企画として、菊畑茂久馬氏の講演会を、2月14日(土)、16日(月)、17日(火)の3日間にわたって開催しました。

講演会は、菊畑氏の講演会を中心に本研究院・学府の教員と院生が討議者として参加するという形式で行われました。3日間のテーマは、「洋画の誕生:日本の近代」、「戦争画という問題:第二次世界大戦と美術」、「反芸術綺談」です。それぞれ菊畑氏の講演後、初日は有馬学先生と石川巧先生、博士課程の福住廉君、2日目は毛利と博士課程の遠藤水城君、そして3日目は花田俊典先生と博士課程の佐々木喜美代さんが討議者として加わりました。

4時間近くにわたる講演会には、連日100人近くの聴衆が集まり、熱い議論が交わされました。また、会期中は大学院棟の一室に、東京の美学校の講師時代に、菊畑氏が学生と一緒に描いた山本作兵衛の模写画を展示しました。山本作兵衛は、筑豊の炭鉱で働きつつ、その生活を描き続けた画家で、炭鉱の歴史を考える上で重要な証人でした。こちらにも、講演会の前後に多くの人々が訪れ、炭鉱の様子を描いた風景や添えられた文章を熱心に読む姿が見られました。

■菊畑茂久馬とはだれか

ところで、この菊畑茂久馬とはどのような人なのでしょう。この講演会ではじめてその名前を聞いた人がいるかもしれません。ここで菊畑氏の経歴を少し紹介しておきましょう。

菊畑氏は、福岡を活動の拠点としながら戦後日本の前衛美術を代表する画家のひとりです。1956年福岡県庁の外壁を会場に開かれたペルソナ展に出品したのをきっかけに、翌年この野外展から発足した「九州派」のグループに加わりました。「九州派」は、その活動を九州にとどめず、日本国内や海外へと広げていきます。その自己破壊的要素をはらんだ過激な前衛運動は、今日、戦後日本の美術史を語る上に欠かせないものとして評価されています。

菊畑氏は、60年「九州派」を退会し、「洞窟派」を結成します。そして、翌61年、材木のまわりに大量の5円玉を撒き散らし、「芸

術」の価値と市場との関係を暴くものとしてスキャンダルを巻き起こした<奴隷系図>のシリーズを読売アンデパンダン展や国立近代美術館の「現代美術の実験」展で発表し、「九州派」という枠を超えて美術界の風雲児となります。64年からは、<ルーレット>と題されたシリーズを展開、日常的な事物を用いたアッサンブラージュの構成的作品を発表し、日常性や土俗性を表出する表現活動を行うようになります。

華々しい活動の後、しばらく小休止状態に入りますが、80年以降は「天動説」や「天河」など、これまでの荒々しい過激な作風から一転して崇高な平面の絵画作品の制作に取り組みはじめます。88年には、北九州市立美術館で「菊畑茂久馬」展が開催され、今日ではその歩みの再評価が始まっています。

■なぜ菊畑茂久馬なのか？ 越境者の仕事

もちろん比文は芸術系の大学院ではありませんし、美術・美術史を伝統的な意味で専門としている研究者がいるわけでもありません。では、なぜ菊畑茂久馬講演会を比文の10周年の企画として考えたのでしょうか。私はたまたま企画当事者でもあったので、その立場から少し考えたいと思います。

その答えのひとつとして、菊畑の活動が、「越境する文化・共振する世界」という比文の理念をあたかも体現していることが挙げられるかもしれません。菊畑氏は、現代美術家として知られる一方で、アウトサイダー的な美術史家でもあり、巧みなエッセイストでもあります。その成果は『菊畑茂久馬著作集全四巻』（海鳥社）としてまとめられています。また福岡県立美術館の連続講演をまとめた『絵かきが語る近代美術:高橋由一からフジタまで』（弦書房）は、独特の視点で近代美術史を大胆に再構築するものとして昨年大きな話題を呼びました。それは、美学や美術史という枠を超えて、文学や歴史学、社会学などさまざまな領域を自在に横断するきわめて「越境的」な活動といえるでしょう。

菊畑氏の作家としての活動は、福岡にこだわりながらもグローバルな同時代の美術運動としての広がりも持っています。「九州派」という動きは、日本の一地方の動向でありながら、ネオダダやコンセプチュアル・アートなど同時代性をもった世界的

な運動として、海外の美術理論や美術史の中でもしばしば紹介されてきました。東京・大阪を中心とした美術が主流だった戦後美術史において「九州派」は特別な位置を占めているのです。それはローカルとグローバルの結節点ともいえる存在といえるでしょう。そうした意味では、この講演は大学院がそもそももっていた理念を再考する貴重な機会になると考えたのです。

■ アマチュアの知識と「世界」の把握

しかし、それだけではありません。菊畑茂久馬氏という画家であり、すぐれてアマチュアの美術史家を迎えることは、「知識」とはなにか、と本質的な問いを立て直すことと私たちは考えたのです。そして、このことは今日転換期を迎えつつある大学という場のあり方を考えなおすことにほかなりません。

高等教育の「タコツボ」化は長く批判されてきました。事実、現在日本の大学教育もディシ専門プリン領域によって分断され、さらにその専門の中でもそれぞれの研究対象によって細かく分類されています。それはそれなりに長所もあるのですが、その一方で研究が深まれば深まるほど、横の連関は失われ、しばしば私たちが生きている社会との接点さえ失われてしまうことがあるのも、残念ながら事実です。比文もつねにこうした危機に直面しているように思われます。とりわけ、設立から10年たち、制度として安定しはじめるにつれて、当初の「越境」や「共振」という理念がいつのまにか風化しつつあるように感じられる今、なおさらです。

先日亡くなったパレスチナ人の比較文学研究者で、政治的発言で知られるエドワード・サイードは、『知識人とは何か』（平凡社）という著書の中で、やはりアメリカの高等教育における専門化の問題点を指摘しながら、「すべての知識人はアマチュアであるべきだ」と主張しました。サイードによれば、アマチュア主義とは、利益や利害、あるいは狭量な専門的観点にしばられず、憂慮や愛着によって動機づけられる活動のことです。サイード自身もその政治活動において偉大なアマチュアでした。

菊畑氏はアマチュアであると書きましたが、それはこの文脈で肯定的に理解してほしいと思います。

■ 「越境性」と「学際性」

比文の特徴をあらわすときに用いられる「越境的」とか「学際的」という概念は、単に異なる文化や専門分野を横断することを意味しているのではありません。それは、世界の特異な把握の方法を表しています。それは、世界をさまざまな要素に分解し、精緻に分析し、再構築することで知識を得るのではなく、世界を本質的に象徴する一断面を切り取ることで、大胆に呈示して見せる力と言ってもいいかもしれません。

たとえば、九州の炭鉱史を理解するのに、その背後の近代化政策や資本主義経済、文化や地域性を詳細に分析するのも知識のあり方でしょう。しかし、今回展示で紹介した炭鉱の生活を生き生きと描き続けた山本作兵衛の模写画のように、一瞬にして身体的に把握するのも知識のもうひとつのあり方なのです。私たちが今回注目したのは、このアマチュアの技術です。

世代も表現手法も全く異なる芸術家ですが、不思議なことに菊畑茂久馬氏はその山本作兵衛氏を唯一の師として慕い続けました。それは、この独特の世界の把握を2人が共有し続けたからにちがいません。今私たちにとって必要なのは、しばしば断片化し硬直しがちな「知識」と現実の「世界」とを結びつけるアマチュアの技術ではないでしょうか。

3日間の討論は、菊畑茂久馬という稀代の芸術家を触媒としながら、歴史や文学、社会学や文化人類学、あるいは美術館や出版産業のように実際に文化実践をしている人やアーティストなどさまざまな人びとが「近代」や「九州」、「戦後」や「福岡」というのを議論する貴重な機会となりました。討論は、講演会が終わった後も、六本松界隈の飲み屋や居酒屋で続けられましたが、せっかくの機会なので、この10周年を機会に今後もなんらかの形でこの「越境的な」プロジェクトを続けていきたいと考えています。

「娘の小学校留学と外国語習得」

井上 奈良彦

(異文化コミュニケーション講座)

2003年8月から6ヶ月間、文部科学省在外研究員としてハワイ大学に滞在し大学における外国語教育のカリキュラムについて研究することができた。本稿では、その副産物として得られた娘の小学校「留学」についての体験をもとに特に英語習得とコミュニケーションの問題などについて書いてみたい。今回の在外研究には、家族（妻と当時6歳の娘）を伴うことになった。ここで一番の心配は、娘が現地の学校などの環境にうまく適応してくれるかどうかという問題であった。

娘にとってこれが初めての異文化体験でも初めての外国語習得でもなかった。私の妻は台湾人であり、我が家では日本語を中心に、中国語（北京語）もかなり使い、時々台湾語や英語も使っている。娘は日常生活で中国語はかなり聞いて理解できるし、話すこともある程度できる。英語は表面的には、ほとんどできなかった。ただし、妻も私もアメリカの大学院出身であり家でも英語を使うこともある。妻が娘に話しかける時も、日本語の単語が即座に出ないと英語の単語を使っている場合もある。そこで、娘の語彙の中には日本語より英語を先に習得しているものもある。たとえば、色の名前で、「むらさき」よりは“purple”が先であった。それでも出発前に家で英語を教えようという試みは失敗に終わった。日本にいて6歳の子供に数ヶ月で英語が必要になるからといっても無駄である。

さてこのような準備で7月31日にハワイに到着した。子供の学校選びは、訪問先のハワイ大学に近く評判も良いということで、公立のホクラニ小学校ということになった。ただ、ハワイ大の英語教育関係の教授からESL（英語の補習授業）はあまりよくないと聞き、不安が出てきた。

娘の年齢では小学校1年生に相当するのだが、授業内容を聞くと一応の読み書きや算数の基礎を前提にしているようである。小学校には1年生の下にK学年（Kindergarten）があり、そこで読み書きや算数の基礎を教える。英語もほとんどできないし半年しか滞在しないという事情を話し、まずKから初めることになった。結果的には大正解であった。担任の先生も非常に良い先生で、娘を大いに助けてくださった。多くの子供が新しく友達を作るという環境であり、娘も入っていきやすか

った。1年生であれば、同じ小学校で下のK学年から上がってくるので、すでに友人関係もある程度固定し、入っていきやすかったことであろう。

さて、授業が始まるまで3週間ほどあったので、あわててアルファベットの読み書きやフォニックス（英語の綴りと発音の関係）の勉強を始め、いろいろな教材を試してみた。外に買い物に行ったりすると英語が溢れているわけであり、学校に行くと英語が必要だということも分かってきたようで、娘も英語の勉強にしぶしぶ力を入れた。やはり言語使用の環境というのは大切である。ハワイに来てからもしばらくは親子3人であるときに英語でしゃべると嫌がっていたのに、しばらくすると外で日本語で話しかけると“No Japanese, English only!”などと言いつつ出した。もちろん、英語がだんだんできるようになったということもあるのだが、周りに適応（同化）しようという心理的な要因が大きいと考えられる。結局6ヶ月の滞在終わるころでも自由に英語で意思疎通できるわけではなかったが、英語の使用にこだわったし、“I’m a local Japanese”などと言うようになっていた。ところが、日本に帰ると英語の使用には消極的になってきた。

学校に行き始めると、同じクラスに日本語と英語のほぼ均衡したバイリンガルの子供がいたので、初めは頼りにしていたのだが、すぐに他の子供とのほうが親しくなった。カルチャー・ショックは比較的軽く済んだようである。ハワイについたばかりの時は、いろいろな肌の色や髪の毛の色の人がいるのに驚き、「怖い」と言ったこともあるが、学校に行くと、日系人を初めアジア系、ポリネシア系の人が多いので違和感は少なかったのだろう。白人系のアメリカ人はハワイでは少数派である上に、ホクラニ小学校がある地区では更に少なかった。20人のクラスに金髪の白人の子供は2人しかおらず、その子供たちのほうが、同じ髪の毛の色の子供が一人しかいないとびっくりしていたそうである。また、休み時間におやつを交換している時、髪の毛が黒い子にだけあげる、などと白人の子が差別されるような始末である。

英語に関しても、クラスでは順調に学習が進んだようであった。現地の子供たちも、読み書きはK学年になってから始める子

供がほとんどのようで、アルファベットやフォニックスを最初からいっしょに習うことになったのが良かった。また、クラスのほかの子供達よりも1歳程度年齢が上ということも、この頃の年齢においては認知能力や動作能力(文字を書くという手の動きなど)においてかなり有利に働いたようである。結局半年後には、単語の読み書きなどでは、クラスで2番の進度であった。規則的な綴り字の単語を読む練習にカードを使ったりするのであるが、先生の手伝いをして、他の子供のテストをするなどという場面もあったらしい。2番目というのは、一人物知りで読み書きも良くできる子供がいて、別格扱いであった。このあたり家庭環境も大きく影響している考えられる。宿題が毎日出て、先ほどの単語読みの練習もリストを渡されている。私達は毎日宿題を一緒にやり、単語読みも練習させていた。家でそうしていることをしていなければ現地の子供もどんどん遅れていく。

Sharing Timeという子供達の発表の時間の準備は大変であった。これはまさにパブリック・スピーキングの基礎である。地元の子達は緊張さえしなければ、みんなの前でなんかしゃべれるが、娘の場合はわずかな話しにも毎週特訓が欠かせなかった。また、時々日本の伝統的な遊びの紹介などもさせた。

子供達の目から見れば、娘も別に特異な存在ではなく、初めは英語が話せなかったけれども、すぐにできるようになった、と思っているらしかった。実は、それほどできるわけではなく、定式化した文脈の中では必要な表現を覚えてしまい、コミュニケーションに大きな支障をきたさなくなったのである。面白いこともあった。教室で友達に“think”ってどう書くのと聞かれ、自信たっぷりに“s-i-n-k”と答えたらしい。友達は娘が英語が得意だと思っていたのだろうが、やっぱり日本人の発音だったかな?(英語の綴り字の問題などもあり、そう単純ではないのだが。)また、定式から外れるとうまくいかないことも多かったようだ。たとえば、おやつを半分ずつ分けようと言ったつもりが、うまく伝わらなかったのか友達が全部食べてしまい、もう絶交だと憤慨していた。

定式化して繰り返し使われる表現は、かなり複雑な文も覚えてしまった。はじめは全体のイントネーションを真似ておおよその形を覚えるので、家に帰ってから「学校で、オーユビインスクールランチツデイ、て言っている」というので何のこのかなと謎であった。朝、教室で弁当を持って来たのか学校

の給食を買う(現金かクーポンで毎回支払う)か聞いているというので、“Will you buy school lunch today?”か“Are you buying school lunch today?”だろう、と言うと、違うと言う。後に、“Will you be buying school lunch today?”とわかった。結構複雑な構文であるが、娘は全体を正しいイントネーションで捉え、徐々に内部を構成する単語を理解したと思われる。子供の第2言語習得は、単語と文法で分析的に学習していくのではなく、特定の文脈で機能を果たすまとまりを習得していくのである。

英語の補習授業(ESL)は、通常の授業時間中に対象児童を別教室に集めて行われる。1ヶ月程度してESLの説明会で娘が全くしゃべっていないと言われ、びっくりした。通常のクラスではある程度しゃべり出し、友達もでき始めたようだったので、ESLのクラスを辞めさせてくれと申し出た。ESLは規則であり対象児童に補習を実施していないと学校の責任が問われるようであった(2002年成立の“No Child Left Behind”法)。ESLの先生と学級担任を交えた面談で、通常の授業の方が得るところが大きいようだし、6ヶ月滞在するだけなので、ESLに行かせたくないと言ったが、すぐには受け入れてもらえなかった。ただし、この話し合いは無駄ではなかった。こちらの子供の教育に対する熱意などが伝わり、ESLの先生も教室で少し注意を向けてくれるようになった。こちらも、ESLのクラスの様子を聞き、家でもっと積極的に話す努力をするように仕向けた。また、ちょうどハワイ文化の授業などがある時間帯にESLがある場合は、通常クラスに残してもらった。その後、ESLのクラスでも目覚ましい進歩を遂げたようで、ESLの先生からも褒められるようになった。

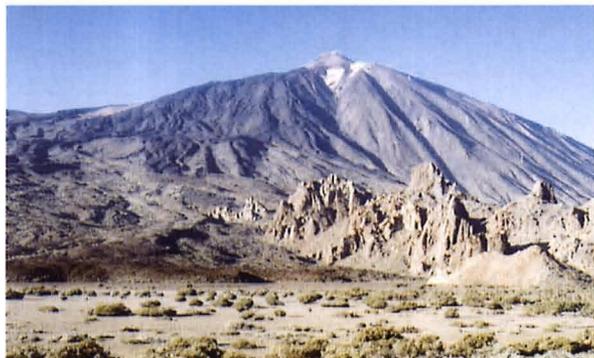
結局、娘は半年間でハワイの学校生活にすっかり慣れ、英語も日常的な会話はかなりできるようになり(語彙は偏っているし、いわゆる文法的な誤りは多いが)、今度は帰国後の逆カルチャー・ショックを心配しなければいけないほどになっていた。実際、今年2月に帰って元の幼稚園に復学したが、ハワイの学校生活ほどには楽しめないまま卒園することになってしまった。このように娘の「小学校留学体験」は外国語習得や異文化コミュニケーションにおける様々な問題に示唆するところが多々あるが、本稿では以上のような雑感報告にさせていただく。

カナリア諸島テイデ火山の観測

大野正夫

(地球自然環境講座)

カナリア諸島と聞いて、どこにある島かすぐに思い浮かぶ方は少ないであろう。カナリア諸島はスペイン国の島であるがアフリカの北西岸、モロッコの沖に位置しており、スペイン本土からは千キロメートル以上離れている。このカナリア諸島のテネリフェ島にテイデ山という巨大な火山がある。テネリフェ島は淡路島に似た格好をした島で、面積にして淡路島の3倍ほどのこの島の中央に富士山とほぼ同じ高さのテイデ山がそびえ立っているのである。このテイデ火山の調査を行いたいという私の提案が学術振興会に認められたのがこの旅の始まりであった。



カニャーダスカルデラからテイデ山を望む。

バルセロナのスペイン地球科学研究所で調査に関する打ち合わせを済ませた私は、眼下にアフリカ大陸を眺めながら3時間ほどのフライトでテネリフェ島に到着した。旅慣れない私は、空港のゲートの向こうに共同研究者であるNemesioの人懐っこい顔を見つけたときは嬉しく、ほっとしたものであった。Nemesioはこの島出身の火山研究者で、彼が研究員として日本に滞在したときからの友人でもある。さて、着陸の時には雲っていてテイデ山の姿を拝むことは出来なかったが、空港から研究所までの道々、そこそこに溶岩流や火砕丘などが見えて火山島にやって来たのだなという印象を強くした。Nemesioの勤める研究所はテネリフェ島の役所(日本では、県庁にあたると思われる)に所属しており、火山の研究のほか、太陽発電や風力発電などのエコエネルギーの開発や環境問題など扱っている。敷地内に立ち並ぶ巨大な風車が印象的な美しい研究所であった。研究所には Nemesio の他にも

PedroやJoséをはじめ、日本で見知った顔が何人かいた。彼らは主に火山ガスの調査を行っており、一方私は地電位の調査のためにやって来た。地電位は火山の地下のマグマや地下水などに敏感なので、彼らの火山ガスの調査と合わせることでこの火山の噴火活動をより良く理解できるだろうと考えたのであった。

到着した翌日、Pedroの案内で早速テイデ山に出かけた私は初めて目にするその美しい姿とともにその大きさに圧倒された。テイデ山(標高3718メートル)は、標高約2千メートル付近のカルデラから上の部分だけでも、標高差1500メートル以上もある。勿論その数字は知っていたのだが実際に目の前にしてみると、その存在感は圧倒的であった。この日は調査に同行していただいた北海道大学の橋本武志氏(以後、スペインでの呼び名に従ってTakeshi)と測定装置の簡単な試験だけを行って引き上げた。Takeshiは今回の研究計画を立てる際に相談に乗って頂いた火山の地電位研究の専門家で、お話しするうちにこの計画に非常に興味を持った氏に御願いで自ら出張していただくことになり、日程の前半約3週間を同行していただいた。



滑りやすい急斜面での測定。遠くに島の海岸線が見える。

さて数日間の準備の後、天候の回復を待ってよいよ山頂での観測を開始する日が来た。このテイデ山は標高3550メートルまでケーブルカーで登ることが出来る。実は渡航前には全く予期していなかったのだが、その山頂の駅の隣にケーブルカーの保守のために職員が寝泊まりする小屋があり、そこに泊まり込んで調査を行うことになった。Nemesioいわく、「そ

○○○ 海外レポート

れが最も利口な方法だから」だそうで、強風のためしばしば停止するケーブルカーの運行に縛られずに作業するためであった。この駅から頂上までの標高差にして約150メートルの美しい円錐形をした山頂部では現在も活発な噴気活動が続いており、この山頂部が我々の最初の観測対象であった。さて、山頂の小屋に泊まり込む部隊は、地電位グループが私、Takeshiと学生2名、火山ガスのグループが学生6名の大所帯になった。学生達の多くは、テネリフェ島にあるラ・ラグーナ大学の大学院生でNemesioが指導している学生であったが、バルセロナやマドリードなど本土の大学の院生もいた。また、DavidとMariajoséの二人は勉強のために研究所を訪れているサラマンカ大学の4年生であった。実は出発間際になって、Nemesioをはじめ研究所の職員が皆忙しくなり、誰も同行しないと言うので少々心配した。噴火の心配はまず無いにしても、極めて危険な場所での作業であるし、国立公園の管理者やケーブルカーを運行している人々との交渉も日々必要になる。最年長とはいえ日本人の私が彼らの面倒を見るのかと心配したのだが、これは全くの杞憂に終わった。彼らは非常に個性的かつエネルギーに満ちた集団で時折大声で喧嘩もするものの、概ねチームワーク良く様々な仕事を着々とこなしていくのに感心させられた。



山頂の小屋で。筆者(左端)から時計回りに Eleazar, Mariajosé, Takeshi, Pablo, Inés, David, そしてPedro(本文中のPedroとは別人)。

山頂部は急傾斜で非常に滑りやすいため溶岩流に沿って作られた登山用の小道以外を登るのは困難であった。このため我々はまず登山道を伝って山頂まで登り、山頂に埋めた電極に繋いだ電線を引張りながら非常に滑りやすいスコリア(火山から噴出された小石)の急斜面を滑り下りつつ50メートル毎にもう一つの電極を埋めて地電位を測定した。麓まで下りたら再び登山道まで回りこんで山頂に登り、やはり滑り下りながら電線を回収する。これを繰り返して山頂から放射状に測線を展

開して行った。標高差わずか150メートルとは言え、気圧が低くまた足場が悪いためこの作業はそれほど容易ではなかった。特に初日、私はひどい頭痛と腹痛に悩まされ、よほど顔色が悪かったのか同行した学生達に随分と心配をかけたようだ。2日目以降も夜は頭痛がして眠れない日が続いたが、それでも朝になると不思議と体は軽く作業は順調に進んだ。結局、天候に恵まれたこともあり5日間かけて山頂部の調査をほぼ予定通りに終えて一旦下山した。

この山頂で過ごした数日間は、身体的には辛かったが本当に印象深いものだった。特に朝夕の景色は素晴らしく、その中でもカルデラに写るテイデ山の影が日暮れと共に徐々に伸びて行き、やがてその影が雲に写って立ち上がる姿は幻想的で美しく深く印象に残っている。夕方になると学生達が何人もかわるがわるに

「Masao、テイデの影を見たか?」と話しかけてきた。この景色は山頂に泊まったものにはしか見ることが出来ないもので、島に住む彼らにとっても特別な物なのであろう。



山頂の小屋から見た夕暮れ。テイデ山の影が雲に写って立ちあがる。

さて下山してしばらくは研究所でデータの整理をして過ごした。山頂の厳しい天候とは打って変わって温暖な気候の海岸の生活は非常に快適であった。この島はヨーロッパでは観光地として有名な所らしく、ドイツやイギリスなどヨーロッパ北方の人々の避寒地となっている。そして驚いたことにこの人々は日の出前の暗いうちから海に入って泳いでいた。日本人の私にはとても海に入る気持ちになる気温ではないのだが、彼らにとっては十分に温かいらしい。また食べ物も美味しくて食生活に不自由は感じなかった。珍しいものではサボテンの実を食べた。サボテンはそこら中に野生の実が成っていて冷やして食べるとゼリーのような食感で美味しいのだが、目に見えないほどの細かい棘が無数にあって扱いが難しい。私も痛い目にあって一度で懲りてしまった。

それからこの島で驚いたことの一つは、とにかく車の多いことであった。島にはいつも自動車があふれており、特に朝晩には片道2車線から3車線もある立派な高速道路が大変な渋滞になっていた。先にテイデ山の山頂は標高3718メートルであると書いたが、実はテネリフェ島は水深4000メートルの海底からそびえる8000メートル級の巨大な山の一部である。このため海岸からすぐに急傾斜で上っており、自転車などは全く役に立たないようであった。またこの島の中央にそびえるテイデ山に強い北東風が吹き付けるため島の北部と南部で全く気候が異なり、北部は湿潤な気候であるのに対し南部は非常に乾燥している。島の人々は花や作物の良く育つ湿潤な北の地域に住むことを好むようで、南部にある研究所の職員や学生も多くが北部の町に住み、片道一時間半ほどもかけて通っていた。こんなこともあってか、とにかく島には驚くほどの車があふれていた。私は平日は研究所の近くの町に泊まり、週末にはNemesioやLuis、Davidらに誘われて何度も北の町まで出かけたが、途中、高速道路の渋滞はまるで日本の首都高速のようであった。なおLuisも学生で、彼はテネリフェにある水球のチームのゴールキーパーであった。スペインは水球が非常に盛んな国であるが、このチームはそのスペインの一部リーグの中でもかなり強いチームであると聞いた。Luisはスポーツで鍛えた体力もさることながら非常に好青年で何かと世話になったが、彼は研究が忙しくて十分な練習が出来ないのをコーチに咎められて試合に出られなくなったことを悔しがっていた。

さて調査のその後であるが、予想通り山頂部に火山活動に伴う地電位の異常が見つかったので、次にその異常がどの程度の広がりを持っているかを調べるため山頂からカルデラ底

に向かって地電位測定を開始した。詳しい事は省略するが、この地電位異常の範囲が予想以上に大きく、その広がりの方を求めて私は次々と測線を延長することになった。この結果は興味深いことなのだが、とにかくもテイデ山はやはり私の予想を超える大きな存在であった。この間、強力な太陽と砂嵐に苦しめられたが、愚痴もこぼさずこの測定に付きあってくれたDavidとMariajoséには感謝している。また現地での議論の中で地下の比抵抗の測定をしようということになり、Joséの協力で急きょ実験装置を作り上げ、Luis他の強靱な学生達が重い電極の運搬や埋設などの作業を請け負ってくれたおかげで、これも一応の結果を出すことができた。そして帰国の日はあつという間にやってきた。このように充実した研究生活を送ることができたのは、ひとえにNemesioをはじめ現地の多くの方々のおかげであり感謝している。また末尾ながら、私が1月半の間大学を留守にするにあたり御協力いただいた比較社会文化研究院と六本松物理学教室の皆様にも感謝してこの報告を終わりとしたい。



Nemesio (中央で子供を肩車している)とその家族と筆者(前列右)。